畫本玉鑑

四

チ 4
1077
4

絵本寶盈溢当世用録

六十九 韓文人
七十一 東坡
七十三 鸞
七十五 子瑜伯元
七十七 下和之璞
七十九 八景
八十一 那古海
七十 賣筆
七十二 秦始皇
七十四 七夕
七十六 玉野美
七十八 倪寛
八十 雲月
八十二 佐野渡

子多 1077 4

八十二 孫秀
八十四 周聚韓杞
八十七 田紀
八十九 楊中紀
九十一 孫逸
九十三 田質
九十五 王義牧
九十七 貨狄
九十九 公力亀宗
百六 廉馬宮
百い 馮媛
百 孔子十哲
百二 一眼之龍
百四 山谷
百六 夏法
百八 楊宣黄雀

百九 韓夫人

韓夫人ハ唐の僖宗の宮女なり。或時紅葉ふ紙に曰。

慇懃御溝水到人間とかく御溝の中よりながれきたりし。かの宮よりいとうしとうしとおもひ。直の事よりてかくぞ。

とおもひしらばすなわちそれ紙をもて紅葉を行紙にかくぞ。

宮中へゆきてなん。韓夫人又楊ひむ。絵かり。

夫人。宮人とうとゆうさ。平紙ぐ妻となる。

紙がいつく。方紅葉ハ良媒なりとそうきく。

十

寰筆

寰筆隱者と称せしかの人遇ひ難く
曰。蘿外流水流横花ま然夕陽收欲

知る字知れ知又恐芭蕉不耐秋。これ詩のこゝ
隱者の住ひ。ひらけひらけるを海をとゝろ。水ハ閑
よりのれ蘿ハ深よ閑ら色。日もやうく西山よ春
生ずるの手ま咲とうわ花例の芭蕉よ。吾
魚を書く詩ひ事とまくせんとおもへ
芭蕉ハ人ろきこのの色ば風よやづまく先ぬ
ゆきて書せびして詩りぬ書をけうやよ
ふをの云いの題。畫ううとをみ芭蕉よ。物
ちところと描ハけうるべし。ゆうんと歌ちう
ゆうう さくうう

十二 東坡

東坡居士名ハ蘇軾と云。字を子瞻と云。宋仁宗の景祐三年丙子十二月十九日に生る。其年六月徽宗建中靖國元年に卒す。眉州の人也。仁宗嘉祐二年始て京に来る。歐陽永叔考試の官なる時。蘇軾が文を見て。驚きよろこんで曰。老夫當に此人を避て一頭地を放つべしと。仁宗挙用して内官をさづけんとす。王安石云。人沮で接げど。蘇軾外官をもとめて杭州に通判す。そなた杭州に密州に徙る。又徐州に徙る。又湖州に徙る。御史舒亶宰相王珪等に誘られて。黄州團練副使の官に貶す。時蘇軾幅巾芒屩を履て。田夫野老と話す。自楽しめり。故に芒屩を履て。居士と號せり。東坡といふ所に築く。

十二

秦始皇

始皇御狩の時鹿あり。あしよ。杖の陰に立寄り。
そのとき杖をとれば。
太夫乃官をさづけらるべしとのたまふ

七月三

雲漢

雲漢とは天の川なり。八月朔日紅の雲と丹の足袋の足袋の
あるまことなり。これは丹はかしをと緑雲とは
大略風風なり。世太平のしるしなりと云

七月七夕

織女は天帝の姫女なり。その性容姿麗にして
工なり。雲霧ふの織の衣を織成なり。
幸若のこふ海しくて。銀杯とうろこぐ〜き事
をまち海をぐされだうろき容顔も樓へ
ぢらふ眼なり。天帝深く思召のいるるゆえに

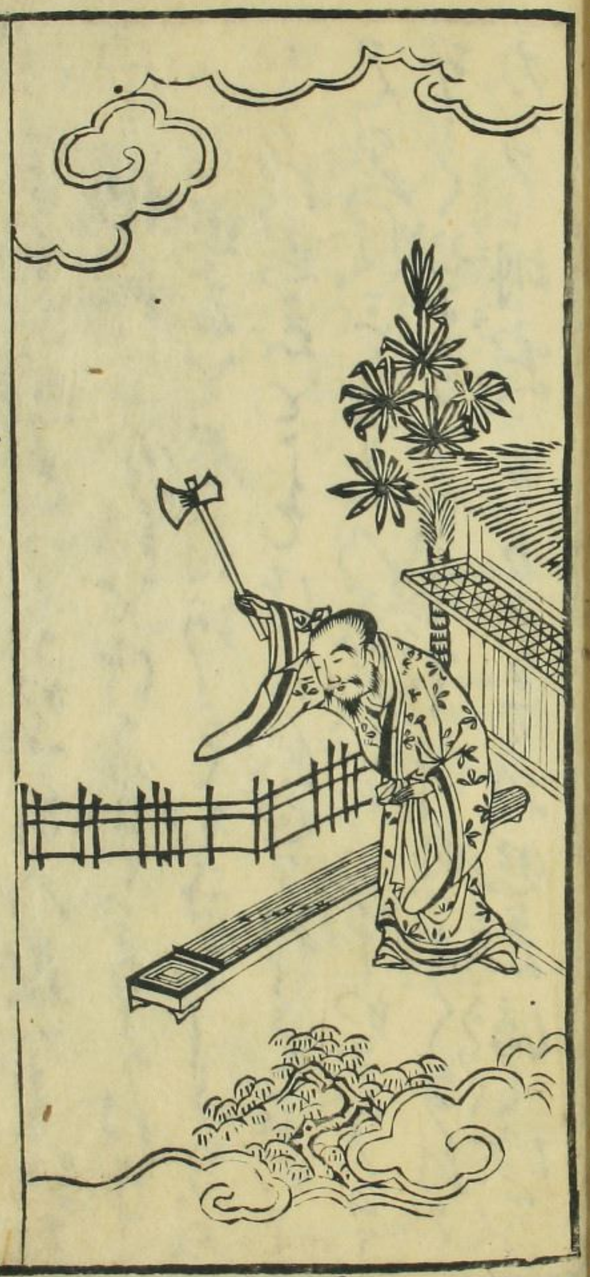
其後自天帝より牽牛ふめあわせらる。婚姻
を怜悧治ひて。河西牽牛ふ織の工をとして。歡と会員て
ゆひてのち。竟ふ織紡の工をとして。歡と会員て
やこゝろ怠りて。天帝これ
をいうり治ひ。牽牛ふ河東の星ふ移
ゆひけ。やうなく一年より一度牽牛をとゝ
とゆりしば。痛つやうわ神をひきゝ
て。その河水のゆきちがひをゆきゝ
うりかつまうけりさ海人月にもかゝるべ
妙閑絵巻とあり絵ひわ又七月七
ふ夢れてもゝ兵均が弟佐ふいく。桂湯城

こゝろざしよ武丁といへる紀人ありて天帝より調
ひ七月七夕織女河を渡る輦車をふ語げ
ゐし吾仰ぎてうらやむ世人今ふるく織女
牽牛を織女七月七夕りと云ふなり
ゐて書言故実ふるゝ又遊み俗
陽とつゝれ夫婦のちぎりあるをふ
月ふ誓て二川の星となれり遊ふ夫婦
俗陽ハ婦なるといふ説をあるいづれ
ふりさんゝ寓言なるゐし

七十五　子期伯牙

子期伯牙は二人ハ琴の上手なり。子期死して伯牙琴の絃を断なり。琴を弾ぜば高と称し高と称ず友の子紀と絃ふるんなり。志高山流水の曲といふ

といふハ山左手なり。伯牙琴を弾ずるに志山ハ行ゝ紀ハ子紀これを聞くいく歳くゝとして泰山のごとし。又志流水ハ行ゝ紀ハ流水のごとしと伯牙ガ云洋ゝくゝ

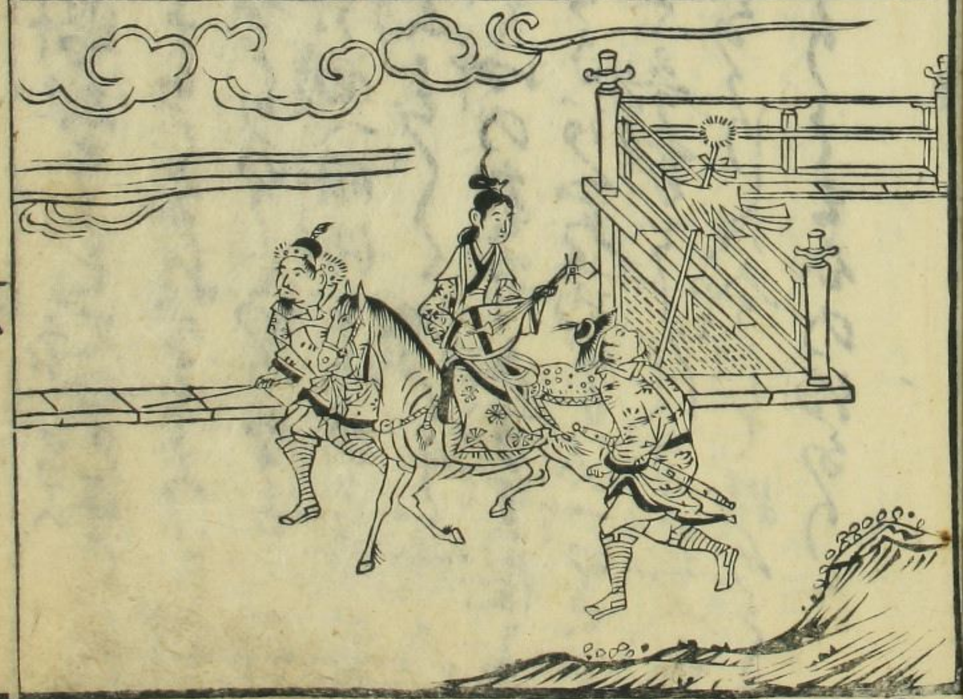


七十六　王昭君

漢の代ハ胡国のゝびと宮中の美人と一人り侍へ。さあらば甲ともゝく善とひゝくおひきうんと云。幸ゆしに志ゝば三の美女の中ハ無女

と一人はうつるべし。されどもいちく探び出さんず
容易うるまじうて。宮女どもれ容貌と絵うし
うしと沈んでいるふうう。宮女各毛延壽こふ
絵師よ金銀と賄ふくかくちうつるく
揚せるるふ。照君ハ貧ばかりちの義なる絵た
のこ。絵師よ金銀とけうつさでつもうばかり
あと照君と眉間けうをかきるのうち。志
かくば照君とそけうれ寵をれとく右帝
見のあば。三の井一の義人あり。帝かざりるう。
はくこれまでも。編そ作のごくくるれで。
力をく胡地へそ。ひきもれ照君泣くなる

ふ。琴琵琶とうづて
悲情と述。白居易
行ふ。明妃の曲なり。
明妃照君乃とあり。
その名ハ王嬙胡地
琴風。眉清秀容顔
清絶。然若幸勅顧
將畫如今都以畫工
中。明妃の曲ハ照君
故事ひとしるる歌
よなれるうふうて。



曲よつゝりく祇つゝり。嘆ゑんこうを。父母の事をば
はなしはつゝど。生ちよゝらんあれ。そゝろうき胡
ふゝとゝしきゝんんのゝらいつゝかりなるん。野の
くれ山くれの道をゝゝ。面へ胡ゆゝとふきうゝ。髮
をば風吹みゝど。煙ゝとゝゝゝ。ゝゝゝ。勝の
紅とゝせゝゝゝり。古ゝの玄井の万里恨よ
ゝゝ。秋のゝゝみ。せゝゝ地ゝゝ。一ゝゝ
ちゝど。ゝゝ遠りと。ゝゝく。辛苦をば。分憂へ。就
やせゝく。ゝ面影とゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。
畫眉の中ゝは。ゝゝりゝゝゝんのゝゝり

七十七　卞和之璞

昔卞和楚山といふ所にて。璞をとりて。みゝくにの玉と
なりぬゝ。楚の厲王ゝ。玉人をして。玉と稱ゝ者
をたゝく。璞を相をし。玉人ゝゝゝゝ。これは玉にあらず。
卞和ゝゝゝゝとゝゝゝ。その足を斬ゝ。ゝの
足を刖ゝ。又その子周の武王の時。此璞をもつて
玉人にまゝゝゝゝゝゝ。卞和ゝゝゝゝ。王まゝゝ。卞和ゝ
刖又次ゝ文王のゝゝ。卞和ゝ玉璞を抱て楚山の下
にゝゝく。泣ゝゝ三日三夜泣ゝく血のゝたゝ。
そのゝゝ文王人をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
彼卞和ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

何ものぞ。ひゞや。和こゝ。我れ汝を殺さん。むかひけるが。宝玉にて王人あるかを知るべし。
和貞士にくゞみ。ふかりりとなりて。
を抱いて文王を見れば。玉人を召して璞を撰ぶ
みがきらくふ。天下無双の義玉となる。玉を抱て
哭せ。處を抱玉哭と云。武玉車よりたゞあと
こゝに車十二乗とてこゝもとといひ。
こゝ迄なり。手はこゝろを考るふ。下和が故事は韓非
子にあり。楚人和氏といひ。変は楚の厲王周の
武王その子文王に璞を献じ治者を書。
韓非子には楚の厲王の楚の字なし。周の武王

の周の字なし。史記の世系をとるに。楚は熊繹王より
以下。厲王といふ名なし。周の文王乃来十一代目は厲
王あり。悪王にくく桀よ流さる。武周の厲王にたく
らふ。下和まぐ。年代ちがふ。こゝもとこれは
てをいつまで。又周の文王は。殷乃湯王の末より紂王と
いふあり。悪王なりしゆゑ。文王こゝをとりがへ。天下を
治む。そもそも武王とぞ。ちがふ。そもこゝよ下和が
母なりしは。周の文王武王はいつゝ。武王をさき
う文王をのちとせ。こゝは。武王は西へく。楚乃武王文王迄
楚乃元祖熊繹王より。十六代目は。蚡冒といふ。
その次は武王ありその武王乃次は文王といふ。

野冒ゑび武王弑たてまつる。此武王文王ゝ和よ
あひ治りてゆり。たゝ伐乃周の字ゆゑ落ちん。
又後周とゝ代わを。文皇帝武皇帝なると。前の
周ゝ遠ゆり。周の文王十九代惠王間の世を。
新田神武元年よりゆる。後周の元和文皇
帝ハ鈔明十八年よりゆる。前周後周時代ゝ
ふ乃ぐゝと。後周より下和まぐゝ。ゝゝよ也
し文皇帝武皇帝にもひとしれぐ。
周又屬王ゝ。楚にを屬王ゝゝ考へ。
世人ふ富ゝゝに伐れて。管見と述べ伐
ほの考よ。ゆゆ帝湯と。後伐へ

十八　倪寛

倪寛書を好む。傍ふ書を。ゝ耕作と。
ゝ。文学ゝ。ゝとゝん

卒九　八景

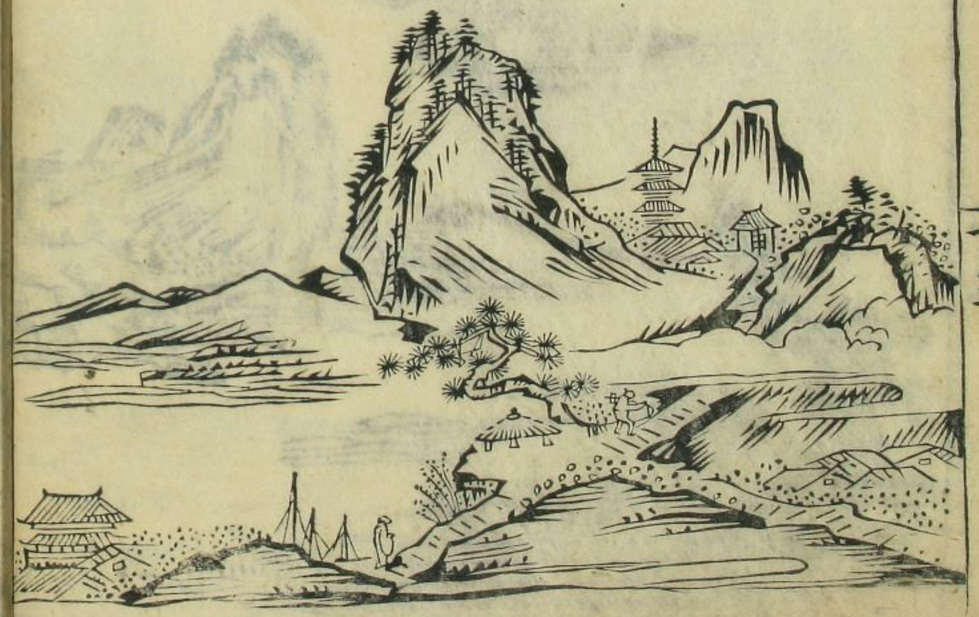
瀟湘夜雨

古渡河平沸水痕
一蓑雨濕黄昏
蘭桂蕙死去彩雲
短笛新招
楚客魂

秋月
江面平湖月滿山
一竿釣船
漁中看
岳陽樓上龍吟笛
洞庭湖
水煙
月孤

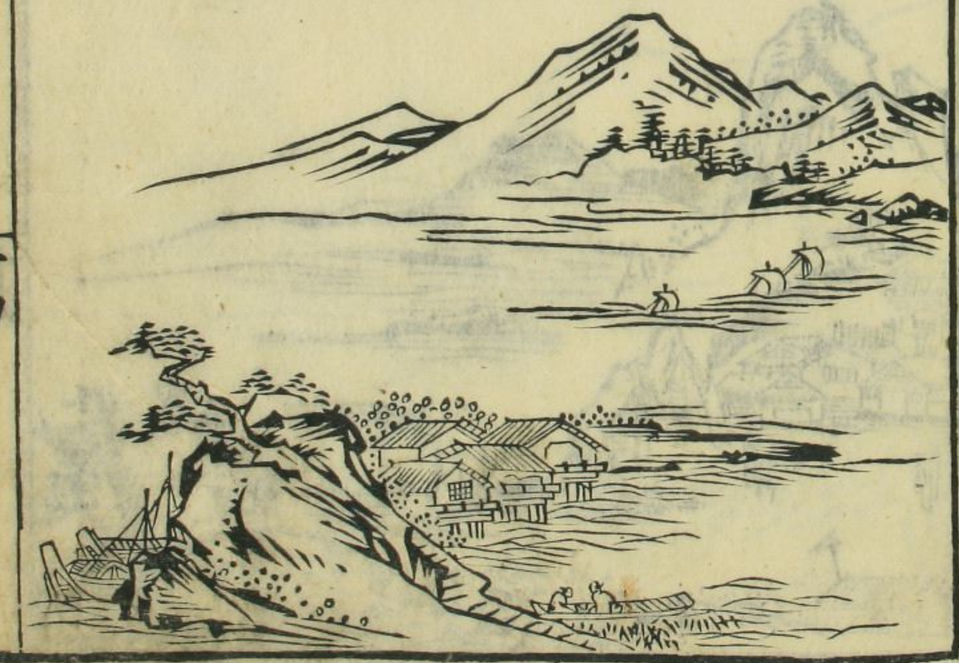
煙寺晚鐘

鐘送斜陽出暮山
遥知煙寺隔前灣
山翁莫怪
昏來晚
欲待峯頭
月上還

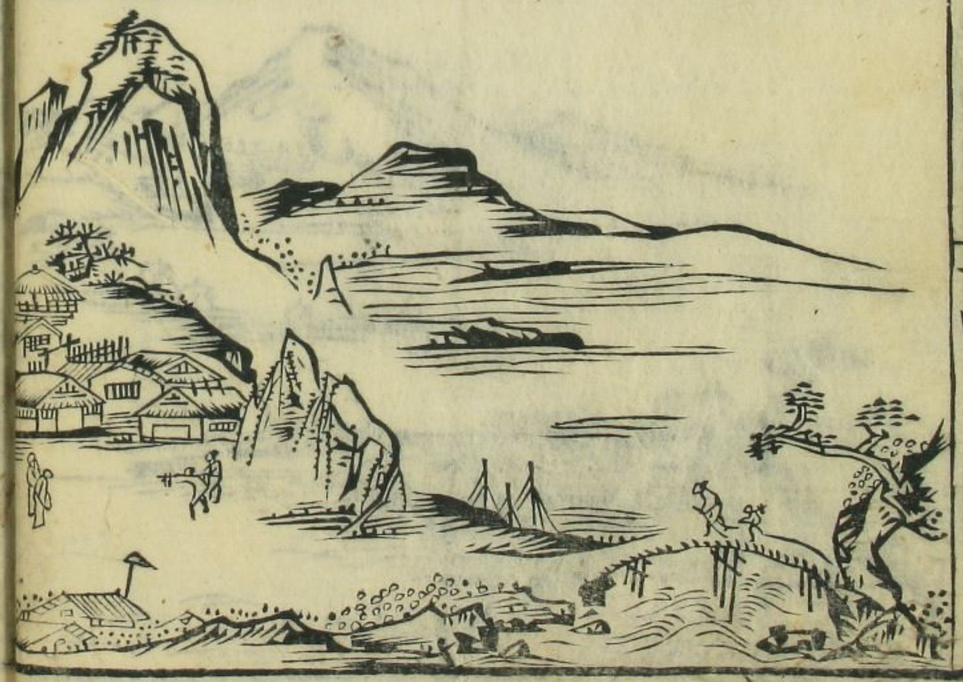


遠浦帰帆

無邊利境入毫端
帆落秋江隱暮嵐
殘照漸收漁火動
克翁閑自玩江南



山市晴嵐
雨抱雪師
欽長汝
張公洞秋帆
帶雲飛
ちぬ市行宮御小
汐騎搖戰
家忠重
松の風
里ちらし
ちらせ
器
ふりの色
そ



江天暮雪
万里江天暮雪里心
翠微花紫濃平林
楊柳陰斷馬歸潭
文況藍園
恬不兼
蓼乃葉
かるる所
ゆきを
ゆくや江の
川のえい
ゆく

漁村夕照

一江晴日

滿砂汀

賣典買來

入りの船

酒半醒

おもひえて

秋きハ

蓑笠未乾

ふくれの雨

柳枝靜

壹声横笛

數葉まち

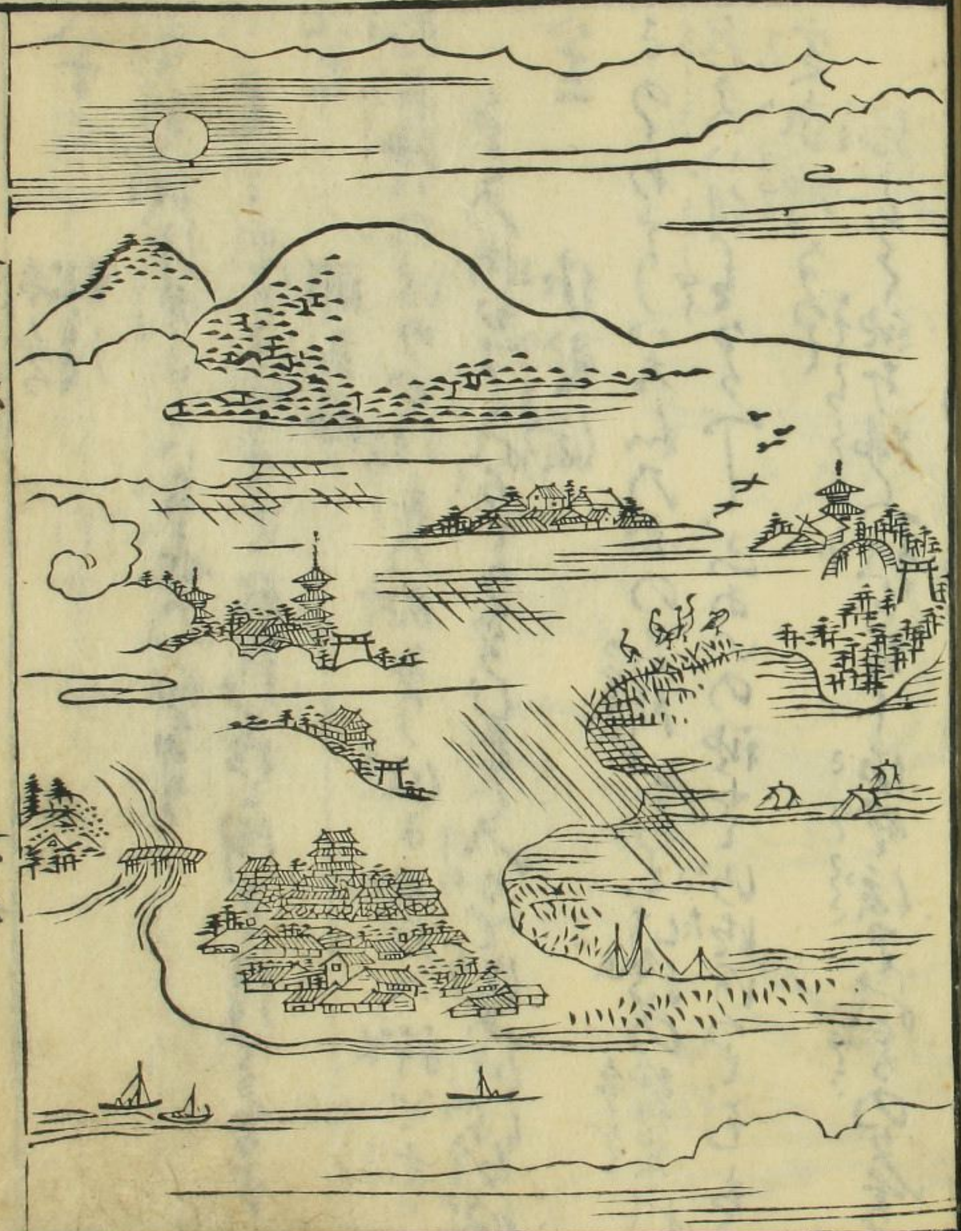
平砂落鴈

點々隨群舊處栖

蓼花蘆葉暗長堤

天寒水冷難成宿

猶自依々恋別離



右の行き玉洞の絵を玉洞の宝られすぐ西
玉洞の行き一西一度行り書し但今一西世ろ海布の
八景あり今異く又我邦より近に瀟湘の八景あり今因
り瀟湘八景とこそ書し

田舞雁の
瀟湘秋月
天王寺晩鐘
住吉帰帆
平砂落雁
堀江夜雨
長橋夕照
高津暮雪

西よ云田みの沈れ夕書名とばこに涙を守
瀟湘ろこ今八海世ろ山を見くこみに秋の月
松の世と軒ひくの代ひろ夕やうき弟れ鐘
ろ帰り蛾八人を見り此海ろうにかつ帰ろ
平砂ろ時雁
をつ星小船夜ア
長橋夕照
高津暮雪

に帰ろ人
ちくしもれ八海び名よ八沈ぬをさ
書ろ行海名宗に表のりをろ沈ろ沈夕ろ星
夕ろれ八表ろ

八十　松月

雲ハうれてくもひくてくろ松月と松ハ月と乃ろ

八十一　那古海

那古海ハ松ハの出任乃新ありハよ日乃入所と書

ゆこの乃海かすしまるくしまで入りと海ハ沖ハ白波

八十二　伊勢海

さのわくりハ大和乃国の名所ありと。さ殿の松ハ

彩文ハ絵もなるべし。山あいの神宮ハ伊勢と。元ち

宮乃郷　うるし

海とくに地ハ湖の新とあり伊勢海ハ新の名書

八十三　福麿寿　或福禄寿

福麿寿ハ天南星とて

福麿と書ものり月事あり

八十四　念力透岩

ろう緑母の病門よりいりしとき母虎の生肉を食へ
て父李ゆ軍虎と偽しにかつて虎に殺さ

れしゆろう緑七歳よりし
時親の歌虎と称ろひ
かつこふ苦しむ者虎りん
しるこ以ていこれなん孝父と
らりし虎ものべしとおりひ
矢とつくかつひつひい
くくるつその矢ねぶさと
せめくゐよりもものとと
なんざいんと言うりせく
虎こゆくゐよりもものと
なとまるひのと
ゆくさくこ

蒙史記とるに李廣あり。猛を。草中のうつ
るとくいる虎なりと。こゝを射るに石のり。
と。徐廣ゐいく。没ねふ。李廣こゝをとるふ
石のりとつゝ張弓より射ふ絶ゝ漢いゝと。そなた
廣ゐ所の邪ゐ。虎ゐりときいく。蒙こゝ
射れ。右ふ平ゐ虎ゐよりなんで。虎と射。虎騰く
廣と傷。亦竟ゐ射殺ゐとゐり。ゐゐとは。
李廣こゝ。射ゐゐり。七倍ふ妻女及ゐれ
射ゐゐゐ。ふ。又李廣虎ゐ殺ゐゐゐふも
あゐゐ。ふ文ゐれゐ。移ゐ行ゐゐ

八十五　昌黎韓湘

昌黎八即韓退之のゐゐ。晩唐ふ有ゐ文ゐりし
人ゐる。昌黎の祖子韓湘とゐふものゐり。ゐゐ八文字
ゐたまひ。詩篇ふ。昌黎韓湘ふいひゐゐ八仁義乃ふ
ゐりゐびとゐゐゐ。ゐゐゐゐゐゐ。ゐゐふ。
ひゐ。教ゐゐとゐゐゐゐ。蒙中
に天地を義。造化の工とゐゐゐ。昌黎
ゐいゐ。今ゐれゐゐ造化乃工とゐゐ。韓湘是
事ふゐゐゐ。義ふゐゐ。
ひゐあゐのけゐゐとゐれ。紫玉乃牡丹の

一枝ありこれを見んとて花の中に金字みく
の句あり 雲横秦嶺家何在 雪擁藍関馬不
前 呂黎不思議なるひとりのよろこんとすれば
うせうり 是うり 韓信が仙術 天下をたもちの
呂黎 佛法とやうり 宝玉の数とたもつきよし
義しうれば 時の美 暗きく呂黎と潮別へるべき
世うり 呂黎 山野と 海とうり ひとも乃変れば
言いやまにうり 白やうをく 著れば 家なれ
たとうりひとてを 那波ふりびうれうり 韓
信いづくもなく まれうり 呂黎うりび 馬うり 行て回
光年 牡丹 花乃中 ゆ乃 ん乃 白 今 乃 紅

ふく 金うり
て 笑の二
句 句と見て
八句の待と
なく 東西
よ 西うと
うり 八句の花
待の うり
信 うり 今
こよ 呼び

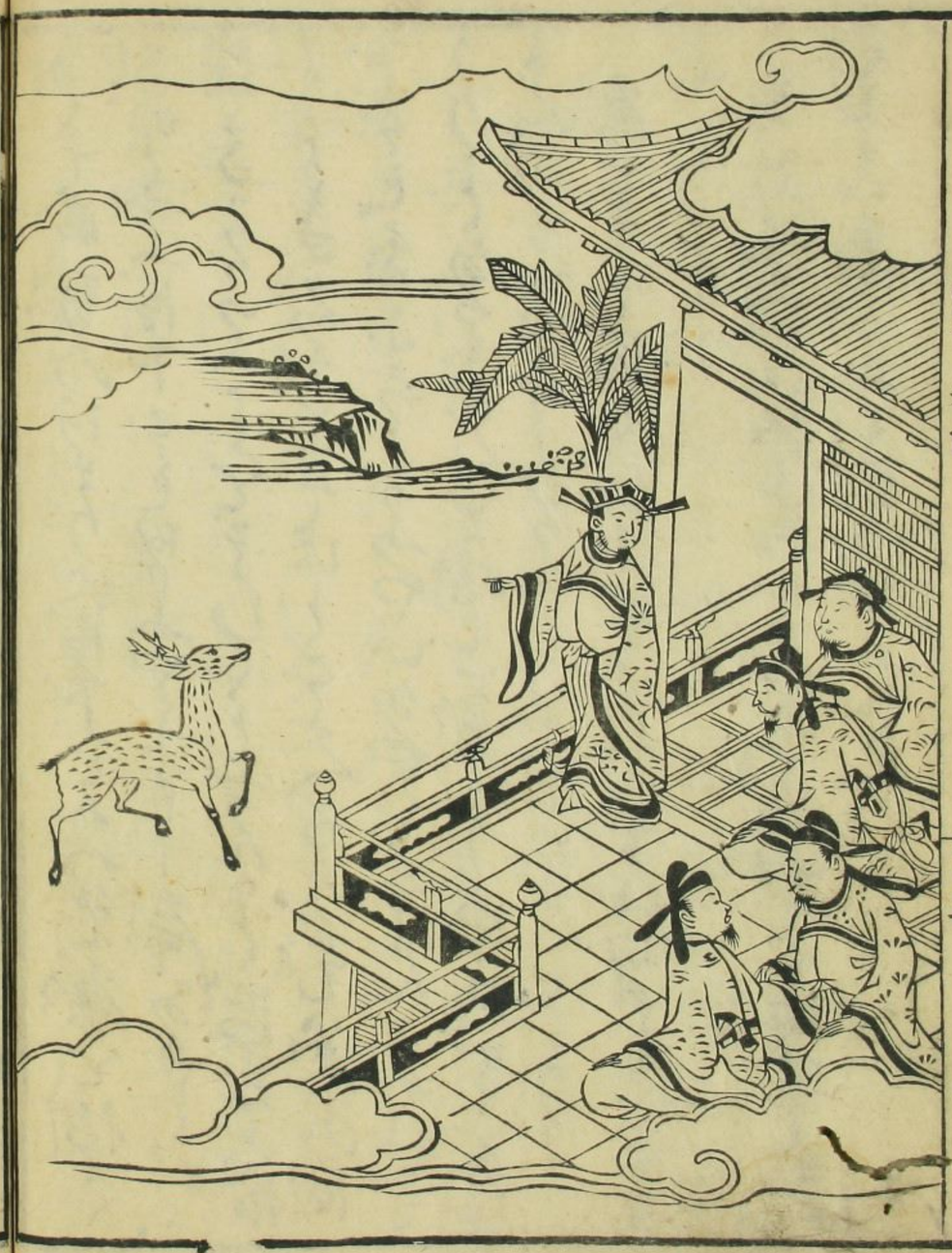
八十六　鹿馬図

秦の始皇に李斯趙高といふ二人の臣下あり。始皇死しぬるとき長子扶蘇に位をゆづる遺詔をとりかくしてこれを秘し書を李斯ひとりにまかせ書を扶蘇に討たれんことをすすめ扶蘇に命をくだして兵をけうり。扶蘇を殺せむ。扶蘇ハ父の命をそんじわるそびたるく死しぬ。そ時に二世皇子胡亥といふ位よりて二世とあり。趙高ハ掌握せんとをもふ。

扶蘇高趙高と謀りて李斯と逆心をくわだてと二世皇帝に殺さる。今ハはるかに臣下とあつ免。鹿と指さるかとつぶやき下ざまにもなりぬ。鹿ありといふ趙高ハ鹿をしくとせんとて馬をとらへ秦の臣下ども。鹿ふたつにやいなやとこたへしてうりとなりぬ。ひとり指さ集り車のかしと偽よ人の方へつらりけるふ。とりけものあり鹿とさして馬といひなせもいれんかと城内をもふ免

なくて威勢のみにまかせ

かもとふ車ハまくらのかしんを



八十七　四知

楊震といひし人ハ後漢乃代の人なり。荆州といふ所の刺史となりて昌邑といふ宿にとまりたり。夜昌邑乃令王密といふものあり。夜ひそかに楊震に見へまゐらせ申すとて金子十斤を懐より出し。楊震ハいかなる事ぞと問ハるゝ乃いはく。夜ハ人ハ見ぬと申すゆへ密ハいかなる事ぞと問ハるゝ乃いはく。日を書ずいかなる人とかいふ。楊震ハ又ものいはずこれを取れといふ。楊震ハ又いはく。天知神知我知子知と申すこと。いとゞ名言とありて四知の

畏という畏ハ楊震がこれなり

八十八　馮媛

前漢元帝の馮昭儀ハたゞ軍奉世がむすめなり。元帝一の寵后傳昭儀と申すよりつぐ寵愛せらるゝ。ある日元帝虎圈をみ給ふ。ときに宮わらべ五六人ありて。その時ひとり熊いでゝ圈をあく欄干を拳て殿下のぞんとす。人々ハ皆驚て。みなおどろきて北へ引退く。馮昭儀ばかりハ。そんで熊の前へ立ふさがりて。元帝問給ふ。人ハみなおそれしよ。なんでそんの中へ。そんで熊よりてこゝ。や。馮昭儀こたへいく。猛獣ハ人をしたゝく。怨讐

やむと雖ども御庭より帝〻ん事をとらひ勇とふく
鶏よりうと曰ふ帝感じ給ひ[illegible]
ありしと也

八十九　樗中仙

ひう〻巴印といふ所に大なる樗の木あり。其
の樗実とうとく収りて[illegible]の中ふくへ
ば三日斗を入れば益々なり樗二月あり後に
見ればとくおしとさらる。或時人と本よりも

山ふところの乃樹とうゑ尺ゐふ宮さきとハ法ゆの樹
乃ごゝ〻ゝと剛毛まゝく尺ゐふ思織やこう
し樹乃中ふなのく二曳けり。鬚を眉し。ゆか
瞞鉢と云く肌神紅明とあくけきうゐり。れ
ね鞠して氣様。為一尺あまり。技筋ゆて自若とや
ゝゝゝ

九十

孔子十哲

抑孔子大聖人ハ字を仲尼とぞ申なるる。父ハ叔梁紇母ハ顔徵ぞ申る。紇梁紇の称て尼丘山乃祈より誘とうけ。あ生ちるを。ひ。こ。ば。尼丘山の尼ハ字とかゝどり仲尼と字ゆふ。延生ま陳ゆる時代ハ周の文王の末二十五代靈王二十一年魯国より行く。襄公乃二十二年。庚戌の歳十一月庚子ふ生を。ゆふ。その生を。ひ。こ。ひ。而ハ魯の昌平郷の陬邑とかやゝ。れ。俗生乃辛酉の年月ゆく。牧乃也孔子ゆふ。ゆ。く。ゆ。ゆ。ゆ

安じ行聖人あれば。長治ふよ治まるべし。三皇五帝
三王の道を演。仁義礼智の教を廣め治ひしか
三皇とハ伏羲神農黄帝。五帝とハ少昊。顓頊帝
嚳。堯。舜。三王とハ夏の禹王。殷の湯王。周の文王なり
こゝを天乃命ぜ孔聖徳あく生そう。孔子ハ集め
て大成ちゝく。皆そ乃を成就せり。衰世ハいそ
治ひしうば。獣の禍ハ得ず麒麟出られども。虞これを
殺せり。孔子我を知ること莫しなんと道の衰をなげき
治ふ。ちゝおのら退て春秋をたゝり治ひ。そのゝち
周の文王二十八代敬王の元十三年。獣ハ西方に衰ス
十六年壬戌正月己亥孔子七十三歳にして卒ひ。

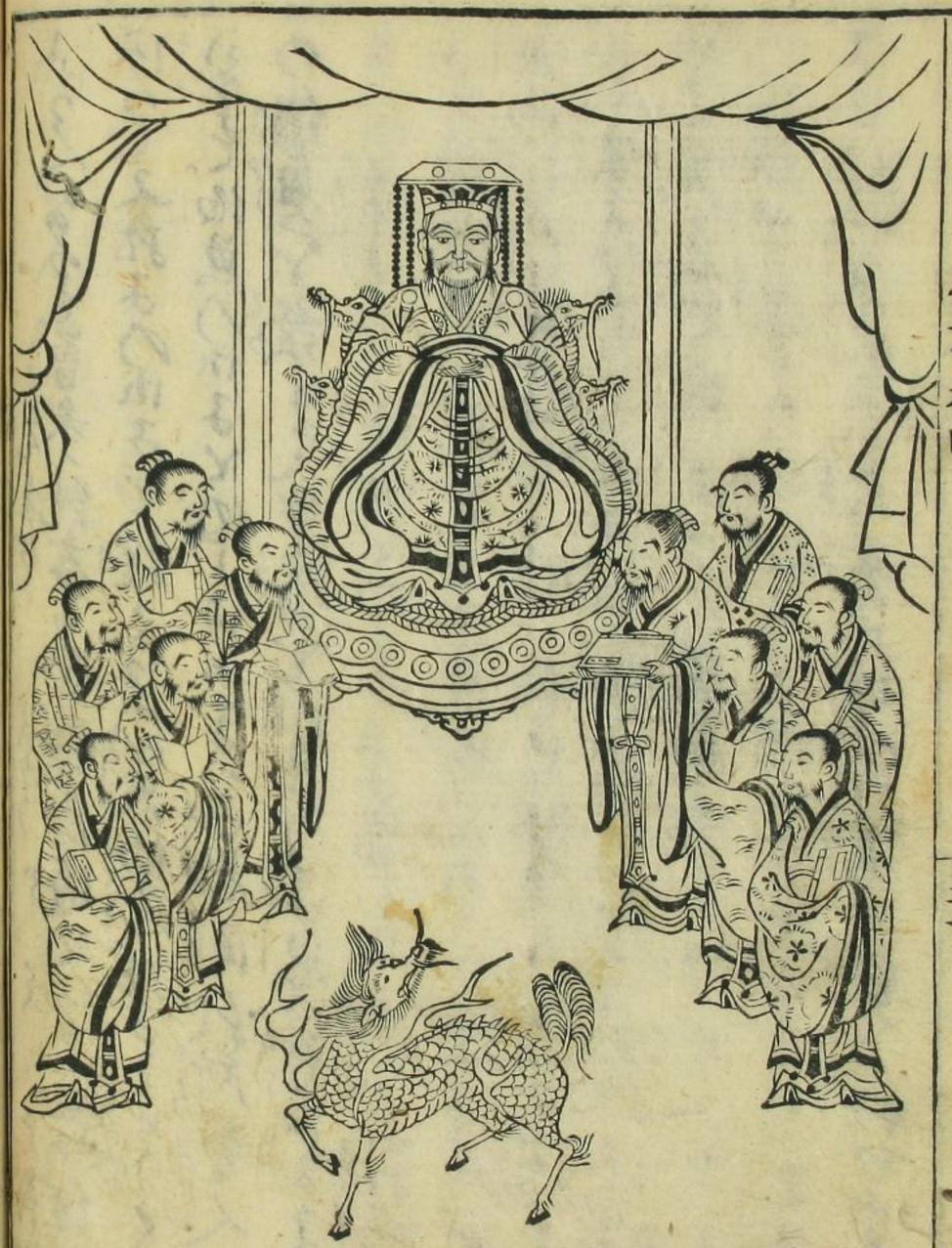
獣の城小の西とよ葬ること。弟子皆悲哀哭踊ちく
心喪と服ちゝこと三年。こゝ子貢家のとよ廬して
凡て六年孔子の在日のごゝくにぞ変なりゝ。ゆゝ
かゝゝゝゝゝ。天地開元ゝゝ来孔子ハごゝきゝ
人ハ。ゝ。ゝ。ゝ

仁義礼智信といへども固ありとして眉をひそめ、
きらひ、傷者といへども人を殺し呵責するのうとして、
白眼ふるる事とぞ思はれ侍る。其道と学ぶ者
も、文学よりのみ学ぶべく、道学の信なり。古の文学と
いふは、三皇五帝三王の書を通じ、己が知行とせ
ばこそ道学なれ。その中にはいろいろ、末の学者は文と
書、詩と詠り、花義と辞、歌と変じ、詩歌
つくれば、それ風流とのみ多くなり、
かく仁義のみなく人倫の情ふかく、利はよせ
ねとむさぼりきらひ、孫子の者ならば、
ざるもむなり。詩文は人をとりけ、志とのみ

ぶるべく、徳とやうのひ心とくさんとなるべいり
でこれを捨ずして、本と物として、まは走り、学かしこ
らずして異端佛法とのを信ずる。その多は名利
利走の人にして、行馬の童は笑ひ、ぶんぞん
ひろく聴ゆるなるべしや。物ぶり、
ぶ。されば学問徳行のみなりて来たると窺
ずとも本聖人をそなへ、聖人はこれ
人道の祖なれば、これをやみそれ、忠孝と
なるべきなり。孔子知とするべく、
雲泥万里のちがひあるべし。学問知とは学
くるべし。学ぶべきんだ。にと織て物を遠ま

ぐ。抑又十哲といへれい孔子門弟三千人ありて、
そのうち六藝に通ぜるもの七十二人ありしを七十子
とをいへり。十哲は又そのうちふるくへぐ
なるべし。十哲は徳行とは顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓、言語は宰我・子貢、政事
には冉有・季路、文学は子游・子夏、是なり。
十人の哲なりこれはいづれも聖人なれども
しらず除くべしとて文学とあらに
にはいづれも十人のうちなれども新田は最賢にて
聖人は亞聖と賛じたまひしなり。曾
参は聖人の道を一貫して續しこれ又孟

子なり。曾参純孝なるべし。親孝道とは孝経
にあり。又孔子の門人を經といふ。字は伯魚孔子より先に
卒せり。伯魚の門人を伋といふ。字は子思。聖人
の徳奥を發して中庸を作り、子思は曾子に
学び曾子より道統を受けたり。子思より孟子に
伝へり。孟子は東魯の人。孟子の
門人は万章・公孫丑なり。孟子没して
後、宋にいたりて周茂叔道を始めて程明道・程伊川
の二子に伝へ、程子の門人楊亀山より羅中素に
伝へ、羅中素より李延平に伝へ、李延平より朱文
公に伝へ、朱文公は朱熹なり。四書五経を注せり



九十一

遜畤

周の文王の時所仏
ひろうの帝初へ登
しが虞芮とうかた
と聖りしよ田とあ
らうふうのほうと云
俚ときけど田れ
墻の畔の一方う
うぐれて先を
へとうべしと方
ともよ譲りくれ

ゆゑ。術伝はゆくえの。此理を見て用の可きを知
てそれより教はゆゑで。好りそうとなる事

第十二　一眼の亀

肩亀の浮木。優曇華の咲時。弘法の金鑛
て云ことに付て。色法華經に沉相あり。
集ふを。仏教より遇ふ。肩亀の浮木はいてそうと
をかすことはり。海の底より。膝の下より目のある亀あり。
此亀三年に一度浮上る。後の下より目はつ
ゆへ。日の光をうけて。若なれば浮木に
あひ。そのうへより甲をかけて。此浮木に表
表へ。はけら穴あり。かの穴へ亀後の下の目

りあて。とあてゝ。はてゝ。風吹きあつまる。
浮木と呼べし。亀さゝ海に浮木は生きる
ありし時。浮木の穴より日光をうけ。
三年に浮上る。海に浮木はあふ。
かゝべし。浮木はあふを。穴のはつ木ふ
いべはせん。穴のはつ木はあふとも。目を穴はつ
穴ずんで日の光をもうけ。
は目をあて。穴をもふさ。
穴ずんで。穴をとゝ。
三年はやゝ。
又は。
浮木は。穴はつ浮木はより風吹

ときに、なりくにの光てるとなりのごとく、衣は新
のんなりく、煩悩のそこづるのよりごとくに、仏教の
値遇ときくに、道ときづくときとかれどもこゝに
げといふなるハ、翻訳ときれど、場意といふとなり。
般泥洹経ハいく、園浴花のごとき、樹を植
優曇華といづく、実ありく、花なり、今花開
ぐ、世にまれなり、仏ありと、優曇華ハすなわち
どんげの木なり、施設論のごとハ、瞻部洲を繞
ふ、輪王の路あり、廣さ一路張弩、輪をなき
時ハ、海水のごとく、路ちやうくとなるなり。
輪王世にあれあるとき、大海の水、一路張弩

なり、この輪をのぶ路、ときとするのゆえなり。
金河とは、ときこれの宮なり、荘厳を、論に香水と
なるなり、よ濡ぎ、輪王、例清よ巡り幸なり
に、経兵とは、路ちやうぶ、激びなり、華方よ
ぶ、新よ、烏曇華、仏経とは、亦文句よりなり。
優曇華ハ、蓮華ハ、蓮ハ、霊瑞とは、三ゑ幸ようび現
ぶ、現ぶとは、ときハ、金輪をか、同路よいく、金輪を
の先ハ、北なり、楞伽経の路よ、ぐんげ世るの中よ
なるなり、ときなり、中ゑよ、仏よ、仏樹直よ、修り
泥ハ、菓と、ときと、大さ、樹のごと、それ香義なり。
命と、花なり、故よ、去来よ、仏者なりとなり

九十二　四賢詞

元八第元明作なり。即待ふ。蘓子曾栽数株桄榔林君
処茂一枝奏樂天李白無貴愛咲指西湖當酒盃
仰と乎して亂のまりに門そぐに栽しうやうとそうう。
東坡なり。梅とおもうるハ林君なり。盃と側よと。
酒とおもうへ白乎。李白とうべし

九十四　山谷

山谷は侍白し。江南時多碧玉杖天中有白鶴閑
似我と元早竟多如此鶴
はしるうと。九東坡山谷李太白が作して世人
乃口遊とす。侍よ二より由と得ぬ人なり。頃

山谷行を見わるしふ

衡山雨向万載道中得遺

遥観遂戯題

遺遥近道邊　憩息

慰憊憊　晴暉時晦明

詭語諧讜論　草莱

荒蒙蕘　室屋壅塵

全　僕僮侍偪仄

徑滑清濁混　才一の句

ハ。文字ともよ。口遠ものと。二の句ハ皆心より文字。三の句ハ

月片ゆり。四句月ハみる。詩片。五句ハ艸首。六句ハ

山冠七句月ハ人片ハ八句月ハ水ゆる。めづ

き我行ゆり。わ

九十五　周茂叔

周茂叔ハ周ハ氏茂叔ハ

字なり。名を惟寅とぞ

云ふ。宋の代の人なり。

中興の大儒大賢と

いふ。孔子の孟子没

ひく代ひく天下老

荘仏法を化きもて

儒法断絶せり。

人は其治ひとく。ふ載ふ仏道流と行ぎ治ひ
たとへば河南の二程子十五六歳より師とこのこと学
問を多分きり。周茂叔老く廬山の麓より
居住し。清溪の外とりよ。学堂をつくり。濂溪と
名をきり。このゆへよ。濂溪先生と称せり。常は
蓮と花と。蓮花をよれ池あれどなり。人
の花よ異なりと。泥中七葉れとれ。花を蓮流と
称きり。茶の黒寧六年六月十日。年ゆ七ゆ七
辛酉ひとると。胥大極図。易流。易通数十篇
と作きり。その花蓮流ハ世よ与るごとく。古文ろ
のせしと

孟浩然

孟浩然と襄陽の人なり。初鹿門山よ居れ。
後ハ齢といふ人荊州と為りとれ。ろく府よ至。
府罪ろく周元の未病と背よ発ぐ辛酉年ゆ
十一とりん。弧馬にのつく山居とゆく詩と描しハ孟
浩然なり。李白ゆ詩ろ人ゆろハ韓退之なり

貨殖

黄帝名ハ軒轅氏ハ有熊氏なり。此字に蚩尤
といふものあり。昔の天子ろ流なり。山有洞沢狭
歌砂と歌。石と高。そこでよ天下と机さんとれ黄
帝ろれと亡さんろ行ひく。涿鹿ろ野ゆて

[illegible]殺し給ふ。烏江と陶[illegible]
[illegible]と。[illegible]待ちはべりて。又舟の[illegible]
[illegible]ある[illegible]ひ。貨殺よ[illegible]
[illegible]紀貨殺[illegible]。揮[illegible]柳の
[illegible]蜘の[illegible]蛛[illegible]
[illegible]柳[illegible]蛛[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。又玄宗皇帝と。黄帝[illegible]
[illegible]。[illegible]人の[illegible]事の反[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]と解し

九十八　楊寶黄雀

楊寶をいとし人。みつりなりし時。華陰山といふ山のふ
かゆきくわそぶかくれたるに。ひとりの黄雀。鷹にあ
はれ。樹の下に落くるを。楊寶ふびんとし。蟻どもあつまり
こゝろをせりてさすり。楊寶ふびんのよりひろりて
ゆり。中箱のうちより取くひ。唯黄雀とぞ食ける。百日
目といふに。羽毛相成りしば。楊寶これを放
ちぬ。その夜夢に黄衣をきたる童子来り。
楊寶に向つて礼をなしていはく。我は西王母が
使者なり。君仁慈あり。よく雀を救ふ。こゝを以て
ふかく恩を報ぜん。と白環

四枚をあたへ。君が子孫をして。都四あらしめ。位は三公
ふのごとくせん。楊寶これを聞て。ますます学問
を教授。その比の君。王莽より微弱なれども。
その内光武といひける人。王莽をたをし。光武帝
と申せり。これ漢の世の祖なり。光武。公の車を乗し。
楊寶を招よ。楊寶ども取くびて。楊寶ふびんを震こゝろ。安
帝の時太尉となる。震ふびんを乗こゝろ。桓帝
乃時太尉となる。乗ふびんを乗こゝろ。桓帝
となる。賜ふ子彪。獻帝の時太尉となる。その内
魏の文帝乃時。侵太尉となる。震より彪

ふるくまぐくの世。太射の徳業とわ継ハ大祖の
一黄雀と助けー仁愛うり蜀鰐をとされど孫
教ゆ。あ氏の蛇と
ばみ。哲宗の
法ゆ水と蟻よ蟲
さ世ゝ為ゝ。時
法徳仁道にて。
子孫長久の基
なりし。世人ゆ小
義無仁をとる
べきなり